

加藤寛治 及川節夫

宮城ゲートボール
交流会所属



Kato Kanji (写真右)

1951年5月1日、迫町倉崎生まれ。32歳の時、自宅屋根の作業中に庭へ転落。胸椎12番を粉碎骨折し、約1年2カ月入院し、以降車椅子生活。専業農家で、社会復帰後は田植え機やコンバインを運転し、農作業に従事している。宮城ゲートボール交流会には、発足直後から参加し、活動を続けている。

Oikawa Setsuo (写真左)

1961年12月6日、中田町弥勒寺北生まれ。37才の時、高速道路で4トトラックを運転中、渋滞で停車していた車両に追突。骨盤と右膝蓋骨を骨折し、約1年2カ月入院。退院後、車椅子生活を余儀なくされる。県脊髄損傷者協会広報部長など、各種障害関連団体の役員を務める。

宮城ゲートボール交流会は毎週火曜日午前9時から、善王寺コミュニティセンター体育館で練習しています。障害のあるなしに関係なく、興味のある人は、ぜひお越しください。



宮城ゲートボール交流会は、年を通じて週1回、練習している。メンバーは仙台市や加美町など、県内から集まっている。会員たちは「ゲートボールの魅力はチームプレー」と語る。



全国障害者スポーツ大会 オープン競技 ゲートボール6位

初 めての全国大会。メダルを取れるチャンスを逃し悔しい」と語る加藤と及川。

オープン競技ゲートボールは10月22、23の両日、紫波町の紫波町多目的スポーツ施設で開かれ、加藤と及川が所属する宮城ゲートボール交流会は6位に入賞した。

初めて参加する全国大会とはいえない目標は「メダル獲得」。オープン競技は、公式種目と違い、障がいの重さでクラス分けされない。障がい者という一区分で、ろうあなど、肉体的に健常者と変わらない選手との勝負になる。

しかし、宮城県、秋田県、山形県の車椅子ゲートボールのレベルは高い。車椅子であっても、メダルを取るだけの自信は取れない。2戦目以降は立て直し3連勝を飾り、3勝1敗でリーグ1位となった。メダルを狙える順位に付け、2日目に臨んだ。

2日目第1試合は福井県鯖江Aチーム。終始リードを勝利を確信していた。しかしラスト1プレーでまさかの同点。同点の場合は、両チームの得点の内容で勝敗を決められる。結果、GB交流会は内容負けとなり、初日に続いて第1試合を落とした。

加藤は「1試合目を落とし、気分が落ちた」と振り返る。最終戦は強豪秋田チーム。東北地域の大会で何度も顔を合わせ、お互い手の内を知り尽くしている。しかし、GB交流会は終始先行し試合終了。1勝1敗で2日目を終えた。2日間合計で4勝

信があった。

参 加チームは、東北を中心に全国から24チーム集まり、6チームずつ、4つに分けられリーグ戦で競われる。初日の結果で、2日目のリーグ組み合わせが決められ、2日間の勝敗数の合計で順位が決められる。

ゲートボールは、2チーム10人の選手がそれぞれ自分のボールを打ち、決められた順に3つのゲートを通り過ぎて得点を稼ぎ、その合計点で競われる。自分の打ったボールが、他に当たるともう一度打てるなど、戦略性が求められるスポーツだ。

初戦、宮城ゲートボール交流会(以下、GB交流会)は、逆転負けをし黒星スタートとなった。「このままではメダ

2敗。結果は6位入賞だった。「勝負事に『たれば』はないが、2日とも第1試合を確実に取ってれば、メダルは取れた」と及川は悔しさをにじませる。今後、全国大会に出場する機会がないかもしれないからだ。

ゲートボールはオープン競技のため、次の全国大会で種目が残る保障はない。また仮にあったとしても、国体などとは違い、選手の移動費用などは全て自己負担。場所によっては参加が難しい。加藤と及川は「健常者と違い、障がいの者の競技はまだまだ、いろんな面で認められていない。全部同じといわないまでも、ある程度均一化してもらいたい。自分たちの活動が次代につながると信じている」と未来を見据える。